

実証試験場飼育チーム ヒゲソリダイ種苗生産に成功

この夏、実証試験場飼育チームでは、新規の魚類繁殖技術開発を目的に、ヒゲソリダイの種苗生産に取り組み、国内で初めて成功しました。

一風変わった名前を持つこのヒゲソリダイ(下の写真)は、同じイサキ科の魚で下顎に髭状の器官を持つヒゲダイに外見はそっくりですが髭がありません。つまり、ヒゲソリダイという和名は「髭を剃り落としたヒゲダイ」がその由来となっているようです。



ヒゲソリダイ親魚

ヒゲソリダイは、実証試験場がある柏崎で「カヤカリ」という名前で親まれており、夏から秋にかけて漁獲されます。水揚げ量は少なく、その身は肉厚・白身の大変美味しい魚で地元市場では高値で取引されています。10年くらい前から地元の漁師さんたちもヒゲソリダイの種苗生産に大きな関心を寄せていることがわかり、これが発端で私たちもヒゲソリダイ活魚を少しずつ集め親魚養成してきました。

今春、実証試験場では淡水井戸を用いた「井戸冷却加温装置」を整備し、夏場の高水温時や冬場の低水温時にも魚介類の飼育に適した水温の海水を豊富に供給できるようになりました。その結果、ヒゲソリダイ親魚の産卵も長期間安定的に継続させることができ、しかも良質な卵を得ることができるようになりました。

すべての準備が整い、良質卵が得られた時点で種苗生産を開始しました。魚類の種苗生産工程の中で、卵、ふ化仔魚などの発育段階初期の飼育管理は最も重要です。今回は孵化後7日目を経過した頃に、仔魚の異常行動を観察するなど、初期に多くの問題に遭遇しましたが、その都度適切な対応策を講じ、良好な

成績で種苗生産を終えることができました。この種苗生産の詳細については、後日研究論文として公表する予定です。また、種苗生産結果を地元漁師さんに報告し、協議の結果、稚魚2,500尾を新潟漁業協同組合柏崎支所様に譲渡し、実証試験場の近くにある荒浜漁港で放流しました。現在、残りの約600尾の稚魚について成長データ等を取りつつ継続飼育しています。



組合員のみなさんとヒゲソリダイ稚魚を放流



飼育継続中のヒゲソリダイ稚魚

今回の種苗生産量は少ないものでしたが、地元の漁業・資源保護に微力ながら貢献できたという点で、従来の種苗生産とは異なる達成感を感じることができました。また、長年の飼育実績から、ヒゲソリダイは高水温・低水温に対する耐性が大きいことがわかっており、気候変動による海水温の上昇傾向にも対応できる新しい増養殖対象魚種として期待されます。

(実証試験場 飼育チーム 渡邊 裕介)